627

住吉貝塚（すみよし）

（大島郡知名町住吉金久）

第１図　住吉貝塚の位置

位置と環境

住吉貝塚は沖永良部島の西端，知名町住吉金久の海岸にあって，平坦な畑地帯に立地している。遺跡直下の海岸には泉の湧出があって，乏水地域であるこの地帯では，貝塚立地の条件となったものであろう。

調査の経緯

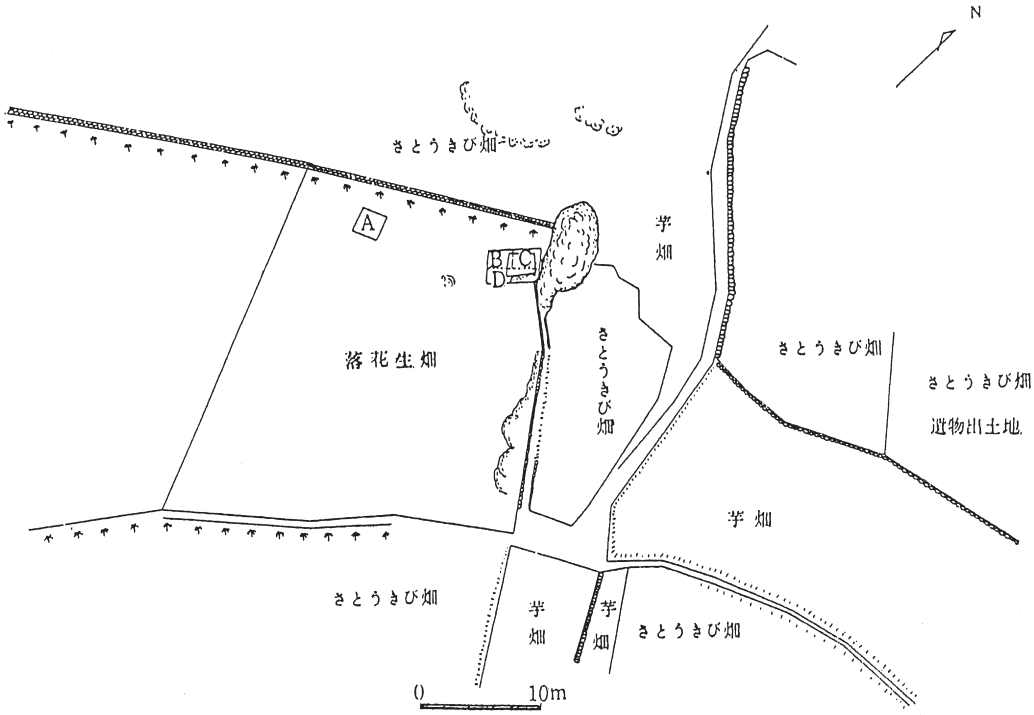
本調査は，昭和30年から32年に至る，九学会連合奄美大島共同調査の，一環として考古班が行ったもので，第一次の宇宿貝塚の発掘，第二次の面縄貝塚の発掘，第三次の与論・喜界。沖永良部のゼネラルサーベイを行った。この第三次で，住吉貝塚の発掘を行ったのである。

昭和32年８月12日より，８月22日まで11日間，地元の協力を得て，河口貞徳が調査した。

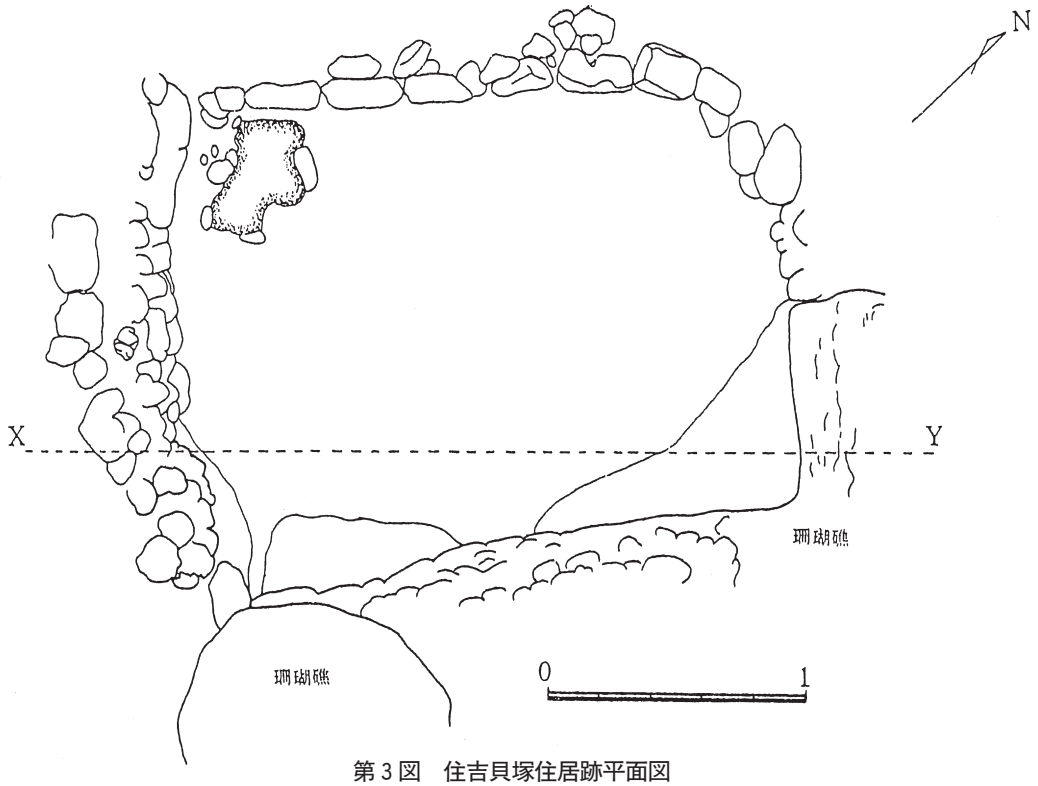
遺構と遺物

聞き取りによって，松下植安の落花生畑を選んで発掘し，ＢＣＤ地点に住居跡を検出した（第２図）。地表下80cmに，縦2.4m，横1.8mの長方形の石組である（第３図）。石組の南西側と北西側から北東へ曲がった一部は，自然礫を選んで並べ，外側を小石で補強して住居跡の壁とし，反対側の北東部から北部への住居跡壁は自然に存在した珊瑚礁の巨岩を利用したものである。従ってこの部分の上部は，他の部分に比べていちぢるしく高くなっている。床面は焦土と灰で覆われており，西側の隅に40×35cmの炉跡があり，木炭が出土した。

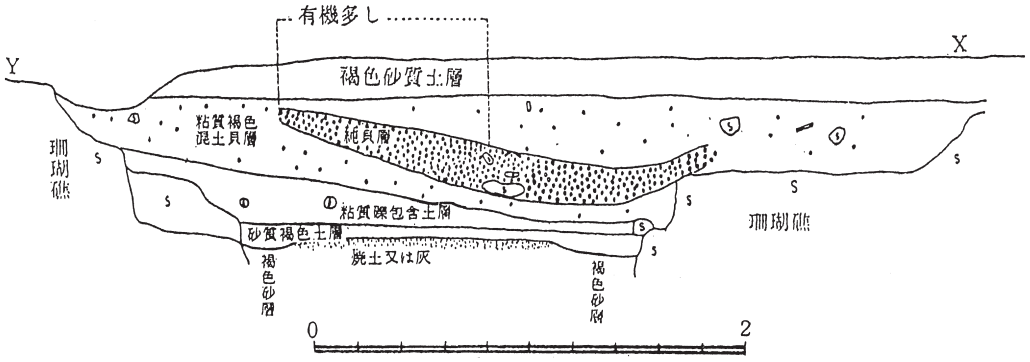
住居跡の堆積状況を見ると，表層は14～20cm，砂質褐色層で，無遺物層である。第２層は，粘質褐色混土貝層で，28～60cm。中間に厚さ20cmのマイマイを主とした純貝層が挟まっている。上層との境は平坦であるが，下層との境は北より南へ傾斜している。この層は遺物を多量包含している。第３層は，粘質礫混じり層で，厚さ22～４cm。上層との境は北から



第２図　住吉貝塚付近図



第３図　住吉貝塚住居跡平面図



第４図　住吉貝塚住居跡断面図

南へ傾斜しているが，下部は平坦である。

第４層は砂質褐色層で，厚さ３～８cm，遺物を少量包含している。住居跡の床面の薄い層である（第４図）。

遺物では，土器は宇宿上層式と下層式が混出している。上層式は，無文で口縁部が肥厚し，胴部の張った丸底，あるいは，同じ器形に，口縁下に細い隆起帯を巡らし，隆起帯の上下に沈線文を施すものである。下層式は，鉢形の平底で，口縁部から頸部へ幾何学文を施したもの（沈線文土器），同じ器形に爪形の連続文を施したもの（爪形文土器），その他，水平位の連点文・沈線波状文などを施すものである。以上の土器のうちで，上層式が主体で，下層式は小片が移動して混入したものと思われ，住居跡は宇宿上層式の時期と思われる。

石器は，定角式石斧・半磨製石斧・矩形小形石器・乳棒状石器・槌石。石皿などが出土している。

牙器・貝製品は，貝層から出土しており，イノシシの牙に穿孔した垂飾・同骨製品・夜光貝匙・貝輪などが見られる。

自然遺物は，混土貝層および，貝層から獣骨・魚骨・貝類が出土している。獣骨はイノシシで南九州のものより小型である。貝は殆どマイマイで僅かに海産貝が混ざって出土している。

奄美では先史時代の住居跡が発見されたのは宇宿貝塚についで二例目である。

資料の所在

出土遺物は，知名町教育委員会に保管されている。

参考文献

河口貞徳ほか1959『奄美九学会連合奄美大島共同調査』委員会，日本学術振興会

（河口貞徳）

平成13年からは知名町教育委員会が主体となり確認調査が実施された。調査は１Ｔ～23Ｔまでトレンチを設定した（第５図）。その結果1～４・10・11・15～17トレンチで遺物・遺構が確認され住居跡も周辺に広がることが確認された。住居跡は十数基に及び，ほとんどが２基ないし３基が切り合った状態であった。形態は周囲に石灰岩礫の石組みがないもの，周囲に石組があるものに大別できる。後者には，住居跡埋土に小礫が多数含まれるものと比較的礫の混入が少ないものがある。一部掘り下げを行った住居跡の床面付近からは昭和32年調査と同様に焦土と灰の堆積が確認された。

土器は宇宿上層式や喜念Ⅰ式が主体となっているものの一部遺構では沈線文が施された宇宿下層式が主体をなす場合もみられる。

遺物は前回調査とほぼ同様であるが，骨製品では鯨やイルカなどの海獣の骨を加工した装飾品や鹿角の加工品。貝製品では直径３㎜～10㎜の貝小玉，貝鏃。その他，チャート製石鏃，黒曜石の剥片などが新たに確認された。

自然遺物は，住居跡埋土を中心に魚骨・貝類・イノシシ・ウミガメ類が多く出土している。

（森田太樹）

第５図　住吉貝塚トレンチ位置図